

雷電将軍のおっぱいを揉みたい

八重堂の狂気

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その男は決して止まらない。

その手に夢を掴むまで。

目次

はた迷惑な男①	1
はた迷惑な男②	3

はた迷惑な男①

モンドの南東、風唸りの丘の先に位置する岬。かつて、とある恋人たちがここで誓いを立て、胸を打つ感動的な物語を残した。今では恋人たちの聖地として語り継がれている。

そして今現在、その物語の結末に縋るため、男が一人、誓いの岬にて祈りを捧げていた。

「私はここに希います。私は何としてでも雷電將軍のおっぱいを揉むことを求めます。そして願わくばエツチなこともしたいです」

君を思う。遙か遠くの鳴上の地で、そのたわわのおっぱいを揺らし、今日もお美しくあられる彼女の事を。

男の名はシンシ。異名は変態のシンシである。かつて彼は普通の冒険者であった。ただ、ある冒険の最中、ヒルチャールに頭を棍棒で殴られて前世の記憶を思い出してしまったのだ。

そして生死を彷徨うなか、彼の魂は別世界の記憶に目覚め、その記憶が求めた願いに神の視線が注がれた。

「それで…私の祈りの時間を邪魔するとは万死に値しますよ」

祈りの最中、肌を撫でるような殺意を感じた。振り返るとそこにはヒルチャールの群れがいた。一方のシンシは武器を携えておらず丸腰だった。だが彼は決して無力ではなかった。

彼は武器を持たぬ冒険者である。彼は語る。この両手は敵を殴るためにあるのでは無い。雷電將軍のおっぱいを揉むためにあるのだと。そして、彼は愛しき彼女が続べる元素をテイワットで最も使いこなせる原神であった。

シンシから放たれた雷が地面を駆け抜けた。それと同時に地面から黒い砂が舞い上がった。砂鉄である。それは集結すると巨大な刃の流動体となったのだ。

「神の怒りを知りなさい」

砂鉄の刃は荒れ狂う激流となり、ヒルチャール達の身体を切り裂いた。ヒルチャールは相手が丸腰であると油断していたが、気が付いた時には全てが遅かった。盾や棍棒で受け止めようとしても、全てが紙

のように両断される。そして全てのヒルチャールを斬り伏せると、彼は両手を広げて叫んだのだ。

「雷電將軍!!? 私は必ずやその両胸をこの手に収めてみせます!!?」

ブルブルブルブルツ!!?

モンドよりも山を越え、海を越え、遠く離れた稲妻の地の天守閣。そこにて静座していた雷電將軍は思わず身震いをした。

「雷電將軍、どうかされましたか?」

天領奉行の九条綾羅が尋ねた。だが、雷電將軍はすぐに平然を戻し言った。

「いえ。なんでもありません…」

雷電將軍。彼女の身体は人形であり、その内側には感情はない。だが、近い未来、彼女はすぐ穢されるような危機感を覚えた。

はた迷惑な男②

その日、蛍はモンド城の住人からある頼み事を引き受けた。なんでも、ここ最近、誓いの岬にて変態が出没しているらしい。誓いの岬はカップル達の聖地だ。変態はそんな場所に出没しては奇行を繰り返している。だから、どうにかして排除して欲しい、と。そして蛍とパイモンは件の場所である誓いの岬に訪れたのだが…。

「おっばい!!?」

「おっばい!!?」

「おっばい!!?」

誓いの岬でおっばいを連呼する変態がいた。彼は背中腕を組み、胸を大きく張って、大声で叫んでいる明らかにヤベー奴がいた。蛍は心の底から近寄りたくないなと思ったが依頼なので仕方がなく、彼の背後に近づくと声をかけた。

「あの「おっばい!!?」

「話を「おっばい!!?」

「聞いた「おっばい!!?」

しかし、蛍の声は男の声によってかき消された。恐るべきおっばいの力。取り付く島もなかった。パイモンは呆れた様子で言った。

「ムム、どうやらコイツよりも大きな声を出さないと聞こえないみたいだぞ」

「パイモン、代わりにやってくれる?」

「えー、オイラそんなに大きな声出せないぞ」

「あとで飴あげるよ」

「よし、オイラに任せろ!!?」

パイモンは自信満々に胸を張って言った。そして大きな声で話かけたのだが

「おい、おま「おっばい!!?」

「オイラ達の「おっばい!!?」

「なんで聞こ「おっばい!!?」

「おっばい!!?」

「ハア：ハア：ダメだ。オイラにはお手上げだ」

パイモンは息切れをしながら言った。

「仕方がない」

蛭は精一杯声を張って叫んだ。

「おっ 「私の話を聞けえー!!」？」

そう言う男は腕を解き、静かに振り返った。年齢は25歳くらいの見た目で、背はそこそこ高く、モンド人ではあまり見られない黒髪黒目、そして真っ白のスーツの上に白のコートが印象的な男であった。彼は蛭とパイモンの顔を見つめると、僅かに目を見開きながらも、柔かな笑みを浮かべて言った。

「やあ、こんにちは。私は冒険者のシンシだ。君達はなに者かな？」

「私は蛭、こっちは……非常食のパイモン」

「誰が非常食だ！」

蛭の常套句。パイモンはそれにツツコミながらも、シンシの方を向いて言った。

「それよりもお前。公然で変なことを叫ぶなよ。みんなが迷惑してるぞ！」

「変なこと？おっぱいは女性なら誰にでも付いている器官だろう。変なことではないし、二人にも付いていますよ」

そう言う蛭はシンシを睨んだ。下ネタはメタ的にNGである。連呼すると崩壊以上の圧力がテイワットの大陸に降り注ぐ事になる。ただ、シンシは笑いながら言った。

「悪かった。悪かった。お詫びに良いことを教えてあげよう。知ってるかな？時速60キロで移動している時手を伸ばしたらDカップのおっぱいと同じになるらしい。おっぱいに困っていたら試してみると良い」

風神バルバトス様万歳の豆知識である。ただ、パイモンと蛭は呆れたように顔を見合わせて言った。

「コイツ、やっぱりヤベー奴だ。ぶっ倒そうぜ」

「そうだね」

そして蛭は剣を手にしようとしたが、シンシは慌てたように言っ

た。

「ちよつと待てくれ。暴力は反対だ。それに私は神の目を持っていて。君はなかなか強そうだし、もし戦いになればお互いに無事では済まないだろう」

神の目。それは神に認められた極小数の人間が持つ外付けの魔力器官であり、所有者は神の目を通して元素力を引き出し導くことができた。だが、パイモンから見ても、シンシは神の目を持っていたとしても、そこまで強そうには見えなかった。

「ふん、そんなこと言つて、変態の神の目なんて大したことないんだろう」

それ故に腕を組んで偉そうにしたのだが、彼が指を鳴らした瞬間、パイモンと蛭は砂鉄の剣に囲まれた。

「ぎよえええ!?・囲まれたぞおお!!?」

パイモンは慌てふためきながら叫んだ。ただ、場慣れしている蛭は冷静であり、落ち着いた口調で言った。

「別に敵意があつてここに来たわけじゃない。ただ、ここは恋人達が集まる場所だから、そこでおっぱいって叫ぶのはやめて欲しいだけの」

「なるほど。ただ、ここは誓いの岬だ。そこで想人のおっぱいの事を想いながら誓いを叫ぶのに何が悪い?」

その問いにパイモンが答えた。

「そうだけど、周りのことを考えろよ。恋人の聖地でおっぱいなんて叫べたら雰囲気台無しだぞ!お前も好きな人と一緒にいる時に変な事を叫ぶ奴が近くにいたら嫌だろう」

「まあ、そうだな。ならば提案がある。君達は見たところ旅人のようだね」

「そうだけど」

「ならば私と取引をしないかね?私は己が誓いを成就させるために、稲妻に向かわなければならぬ。だが、そこは遠く海の果てにある島国で、しかも近年は荒れ狂う雷雲に囲まれて並の船では難破してしまふのだよ。だから、もし旅の途中で稲妻に行く手立てが見つかった

ら、私も同行させてほしい」

稲妻。それはこの世界の国の一つであり、いずれ旅人が巡る場所に含まれていた。だから、その条件は決して難しくはないものであったが、確認半分、好奇心半分で尋ねてみた。

「ちなみに、その誓いはなんなの？」

「稲妻を統べる雷神バアル。またの名は雷電將軍のおっぱいを揉む事だ」

「……正気？」

「勿論だとも。私はその願いを抱いたとき、この神の目を手に入れたのさ」

シンシはそう言っつて紫電の光を灯す神の目を見せつけた。神の目は人が人生の最も険しい分岐点にて、その渴望が極致となった時に与えられると聞いている。しかし、その願いはあまりにも歪で狂っていた。

「この世界は何かおかしい……」

蛍は強い疑念に抱いたが、パイモンが呆れたように言った。

「いや、アイツの頭がおかしいだけだぞ」

パイモンの言う通りである。彼は変態のシンシ。常識は通用しない。彼の全ての行動は最終的に雷電將軍のおっぱいを揉むこと、そして願わくばエツチな事をしたり、イチヤイチャすることに帰結する。それ故にシンシは再度尋ねた。

「それでどうなのかな？ 私に協力してくれるのか、それとも私の誓いを妨げる敵となるのか？」

「良いけど、どうやって伝えれば良い？」

「なに、私はいつもここで叫んでいる。だから渡航手段を見つけた時は呼びに来てくれたら良い」

「それなら協力する意味ないよね？」

蛍はじつとシンシを睨んだ。ここでおっぱいと叫びながら居座られたら本末転倒である。

シンシは冗談めいた笑みを浮かべながら言った。

「無論、冗談だ。まあ、私も無謀に動いているわけではない。時がくれ

ば会い見えることになる。その時に連絡手段は教えるさ」

そして、シンシは蛍の横を通り過ぎて、そのままどこかへ立ち去った。変態のシンシ。彼はあまねく世界を旅してきた旅人やパイモンから見ても、まさしく変人であった。ふざけているのか、本気なのか、強いのか、掴みどころがない男だった。それ故にパイモンは彼の後姿を見つめながら言った。

「結局なんだったんだ、アイツ？」